

歌に触れる

遊縁の衆(人生を数倍楽しむ会)

◎平成二十三年十月十五日(第十回)

(佐藤 亮照)

震災の跡地に遊ぶ犬猫の淋しげな顔 何をか思う
本堂の庄子に群れるカメムシよ これらも命 如何にことせん
ガラス戸の向こうに揺れる秋明菊 夏の灼熱 忘るる 一絵

(松田 昌泰)

夕闇にわたしは、ここよ、と夕顔は 天使のごとく ほほえみかける
満月や 木々の間に 見えかくれ ブレーキせわしく 安全運転

(黒沼 貞志)

微かでも ゴーヤの花の香 想定外 暑さ忘れて 妻と味わう
暑気払い 主菜を凌ぐ 逸品は 斜光に映える 山並み街並み
焔ひくらしに さそわれ集う 且坐しやまの席 寺鐘も加わる 文月の暮ふみつき
フェンス越し プールの声に 蘇る 河原に遊ぶ 少年の我
行く夏の 暑き舗道の ビジネスマン わが身の記憶 陽炎かげろうの中
渋滞よ 時代を映すか 夕立に 校門前の つながる 迎車
処暑の日は 虫の世界も 引継ぎか セミとコオロギ 仲良き輪唱

「東日本大震災震災・人災などを詠みし四首」

負の連鎖 風評理由に 踊らされ 予定調和に 被災地悲し
わが友に ふたたび強いる 車椅子 影響深し 震災のかけ
水道管 付け替え工事 始まって 想いが及ぶ 被災地の朝

隣国の 事故処理 ニュース 他人事ひとごとに 天に向って 吐く唾の如し

「晩夏の蔵王で二首」

流れ行く 晩夏の雲に 呼応して お釜の水面も 七色変化
ハイキング 帰路で いただく ススキの穂 わが家に運びし もうひとつの秋

歌に触れる

遊縁の衆(人生を数倍楽しむ会)

(千葉 克明)

弔とむらいきをなごませるかな 別れの会 これも時代のなせる業わざかな
「車窓より詠みし三首」

刈り取りしにくい掛けの稲 点在し 昔ながらの 刈り干し 想う

今電車復活して 良し 地球号 人はいつまで 車 車と

線路沿い 切り倒された 木々の山 伸びすぎし ゆえ 杉の木 あわれ